

第44回 シナリオS—1グランプリ

部門②

「鈴峰エレン、二十代。昭和の冒険」

周南 カンナ

「鈴峰エレン、二十代。昭和の冒険」梗概

夏のある日、日米のハーフである鈴峰エレン（100）が、孫で高校教諭の高畑美夢（25）の頼みで歴史総合の補習の講師を務める。

エレンは二十代の冒険を語り出す。

昭和十四年、エレン（24）は報道カメラマンとして通信社に勤めていた。エレンの野望は天皇陛下下の写真を撮ること。その思いを秘めたまま仕事をしていたある日、上司から当時の首相である阿部信行（64）が参加する非公式の式典に潜り込めと命じられる。

エレンは式典に潜り込み、撮影に成功するが後日、阿部からビールを使つての仕返しをされる。この時、海軍中尉の畑田勝幸（24）がエレンを介抱することになる。

翌年、エレン（25）は畑田（25）と再会する。畑田の態度を快く思わないエレンだが、陸軍省でのトラブルから、畑田がエレンを警護することになる。

エレンは戦争の影にイライラを募らせてい

た。その憂さを晴らすように、エレンは畑田をダンスホールに誘う。その後、通信社で畑田と飲み合う。

そこでエレンは、畑田が軍人らしくないと言う。畑田は貧しかったから、タダで入れる海軍兵学校に行くしかなかったと答える。また、大学に行く連中が陛下の臣下とは思えないとも言う。

エレンはこの言葉に一つの企画を上司に提出する。それは、閣僚を通じて昭和天皇（39）の意志を知ることだった。若林は条件を出し、書けなければアメリカに帰れと指示する。

エレンは方々に取材を申し込むが、すべて断られ、ふてくされる。その熱心さに畑田は究極の助け舟を出す。

枢密院副議長の鈴木貫太郎（73）に面会する口実で皇居内に入るエレンと畑田。その後、鈴木が酒で寝込んだすきに、二人は皇居内を探る。

遂にエレンと畑田は昭和天皇と出会う。エ

レンは昭和天皇に質問をし、戦争は望まない旨の回答を受ける。

エレンは陛下の発言を記事にするから畑田に守ってほしいと依頼する。しかし、畑田は転属で鹿児島に行くことを告げる。そして、畑田との連絡が途絶えた。

戦後、エレンは映画館で特攻隊の映像を見て、あいつは死んだのだと探すのを諦めた。

エレンの授業はここで終わるが、実は続きがあった。昭和二十二年、皇居で畑田と再会したのだ。

再会の帰り道、エレンは畑田におぶさりながら、会えなかった時間を埋め、そして別れを決める。

現在の皇居を見たエレンは、初めてこの話をしてやっと、エレンの二十代の冒険が終わったと思うのだった。

(登場人物表)

鈴峰 エレン (100) (23) (24) (25) (26)

(30) (32) 報道カメラマン

(5) 幼少期

畑田 勝幸 (24) (25) (22) 海軍中尉

(32) 生物学研究所職員

若林 大 (51) (52) 日本通信同盟編集長

平沼 騏一郎 (72) 総理大臣

阿部 信行 (64) 総理大臣・平沼の後任

米内 光政 (60) 総理大臣・阿部の後任

山本 五十六 (56) 連合艦隊司令長官

鈴木 貫太郎 (72) 枢密院副議長

高畑 美夢 (25) 高校教諭

金村 拓実 (17) 高校生

女子生徒 A

女子生徒 B

女子生徒C

男子生徒A

男子生徒B

記者

秘書官

警官

医者

衛兵

憲兵A

憲兵B

店員

枢密院職員

近衛兵

皇宮警察官A

皇宮警察官B

侍従A

侍従B

昭和天皇（39）（46）

第百二十四代天皇

○美澄高校・外観

郊外にある高校。

夏の太陽が照りつける。

○同・地学教室前のドア・中

ドアには「歴史総合・補習一日目」の張り紙。

美夢の声「三日間の歴史の補習ですが」

○同・地学教室・中

教室には数人の生徒が座っている。

一番後ろの席に金村拓実（17）が机に突っ伏して眠っている。

高畑美夢（25）が教壇に立つ。

その横に車いすに乗った鈴峰エレン（100）がいる。

生徒らが怪訝な顔でエレンを見る。

エレンの膝には大きなカメラバッグを抱えている。

いびきが教室中に聞こえる。

エレンが少し背伸びして金村を見る。
エレンが車椅子に手を掛ける。
美夢がエレンの車椅子に近づき押す。
エレンが金村を指差す。
エレンと美夢が金村に近づく。
エレンが人差し指を口に当て「静かに」
と周囲の生徒に促す。
生徒らが興味深くエレンを見る。
エレンがカメラバッグからフラッシュ
バルブを取り出し操作する。
エレンが美夢を見て、口で「起こして」
と動かす。
美夢が金村を揺さぶる。
金村が寝ぼけ眼で起き上がる。
エレンがフラッシュを焚く。
大きな音と共に、周囲が一瞬白くなる。
金村が椅子ごとひっくり返る。
エレンが嬉々と喜ぶ。
金村が起き上がり、怒りの形相でエ
レンを見る。

金村「な！ 何だよ！」

エレン「何って、起こしたのよ」

エレンがフラッシュバルブを見せる。

美夢「こちらは鈴峰エレンさん」

エレン「補習の先生よ。よろしく」

金村がふてくされる。

美夢が車いすを押して、エレンを教壇に移動させる。

美夢が黒板に「鈴峰エレン」と書く。

美夢「今回の補習の先生です！」

エレン「改めまして、鈴峰エレンです」

美夢「御年、百歳！ 私のおばあちゃん」

生徒がどよめきの声を上げる。

美夢が用語集を手に取り生徒に見せる。

美夢「さて、補習で『日中戦争』や『三国同盟』を普通に説明しても」

エレン「私でも嫌になるわ」

生徒らが笑う。

美夢「そこでエレン先生から見たこの時代を語っていただこうと思います」

女子生徒Aが手を上げる。

美夢「どうぞ」

女子生徒A「エレン先生の紹介を……」

エレンがカメラバッグからライカのカメラを取り出す。

女子生徒A「ひよつとしてカメラマン？」

エレン「そう！ それも報道のね」

生徒がどよめきの声を上げる。

金村が興味なさげに窓の方を見る。

美夢が金村を見る。

美夢「金村君！ こっち見なさい！」

エレン「あら、いいのよ」

金村が無視して窓を見続ける。

エレン「もつとすごいのあるから」

金村がギョツとして、教壇に体を戻す。

エレン「では、私が報道に入ったところから」

美夢「いつ頃ですか？」

美夢が教科書をめくる。

エレン「1939年、昭和十四年です」

生徒らが教科書のページをめくる。

生徒らが首を傾げながら、隣の生徒とページを確認する。

エレンが笑う。

エレン「当時24歳、でもその前に……」

エレンが教科書に目を落とす。

○（回想）明治神宮・外観

○（回想）同・本殿・外

鈴峰エレン（5）が着物で参道を走る。

エレンの声「私はユダヤの血を引くアメリカ人の父と、日本人の母の間に生まれたの」

美夢の声「どんな両親だったんです？」

エレンの声「父は特派員のカメラマン。母は電話の交換手」

エレンが本殿の中を覗き込む。

本殿の奥は暗く見えない。

エレンの声「私は父に似て、好奇心が強くて」

エレンが辺りをうかがう。

数人の参拝客がいる。

エレンがゆっくり本殿に上がり駆ける。
本殿にいた神職二人がエレンに駆け寄り、首根っこをつかむ。

エレンの声「隠されてるのを見たくないの」
神職の二人が、辺りを探していたエレンの両親に引き渡す。
エレンの父が笑う。

○（回想）上野動物園・ゾウ舎・外

一匹のゾウが寝そべっている。

エレン（23）が柵を乗り越える。

エレンがカメラを構えてゾウに近づく。

エレンの声「父の影響でカメラマンを志した」
飼育員がエレンに駆け寄り、エレンの首根っこをつかむ。

エレンの声「周りが見えなくなるのが欠点ね」
エレンが誤魔化し笑いをする。

○（回想）皇居・外観（夕）

エレンの声「私は親元を離れ、日本に残って

暮らすことにしたの」

美夢の声「どうしてです？」

エレンの声「私の心はすっかり日本人だったからね」

○（回想）同・皇居外苑・外（夕）

カメラを持ったエレンが歩く。

エレンが二重橋を見る。

エレンの声「そして野望を叶えるために」

美夢の声「野望……ひよつとして陛下を？」

エレンの声「そう。女性初で撮影したかったの」

エレンが決心に満ちた顔をする。

○（回想）昭和十四年のニュース映像

「大日本ニュース」のタイトル。

「南京陥落」の見出し。

エレンの声「でも、この時日本は……」

日本兵の師団が南京に入城する映像。

エレンの声「中国と全面戦争の最中」

映像が変わり、日本国民が提灯を持って喜ぶ表情が映し出される。

エレンの声「連戦連勝と浮かれてたけど」

映像が次第に暗くなっていく。

エレンの声「そんなときの話」

音を立ててフラッシュが焚かれる。

○タイトル

「鈴峰エレン、二十代。昭和の冒険」

○（回想）東京・銀座・俯瞰

T「昭和十四年・夏」

服部時計店や松屋デパートが建つ。

道路には路面電車が走る。

○（回想）銀座・歩道・外

歩道には民衆が街頭演説を聞いている。
長い茶髪を後ろで束ね、カンカン帽をかぶり、紳士服を着た鈴峰エレン（24）
民衆の間を抜けようとする。

エレンの声「父のコネで私はとある通信社へ」
エレンとすれ違う人が、怪訝な顔や邪
険な顔でエレンを見る。

○（回想）日本通信同盟ビル・外観
三階建てのビル。

○（回想）同・入口・外
入口に「日本通信同盟」のレリーフ。

○（回想）同・事務所・中
中にはデスクと暗室がある少し窮屈な
オフィス。

デスクで若林大（51）と記者が座る。
若林が手に持つ履歴書に目を落とす。

若林「米国との合いの子か」
記者が履歴書を覗き込む。

記者「へえ！ 特派員倶楽部のご推薦とは」
若林「どこでもいいさ」

若林が腕を手で二回叩く。

若林「これと度胸があればな」

記者「そうだな……にしても遅いですね？」

慌ただしい足音がする。

ドアが荒々しく開く。

息を切らしてエレンが入ってくる。

エレン「す！ すいません！」

若林「どちら様で？」

エレン「きよつ、今日からお世話になる！」

記者「鈴峰さん？」

エレンが大きく首を縦に振る。

若林と記者がエレンの身なりを見る。

記者「男装とは度胸がいいな」

若林「そんなことはない。十五分の遅刻」

エレン「すいません！」

エレンが頭を深々と下げる。

若林「説教は後だ。すぐ行くぞ！」

エレン「は、はい！」

若林が立ち上がり、三脚を取り出す。

記者も立ち上がり、部屋の隅に行く。

記者がカメラバッグを持ってエレンに

差し出す。

記者「はい。頑張ってね」

○（回想）皇居周辺の道路

黒い社用車が皇居に沿って走ってくる。
社用車の前部には「日本通信同盟」の
小さな旗が立っている。

○（回想）黒い社用車・車内

運転席に若林が座って運転する。
助手席にエレンが座り、カメラバッグ
を開けて中を見る。

若林「何で遅刻した？」

エレン「街頭演説に道を塞がれて」

若林「回り道か」

エレン「いえ、敵中突破です！」

若林が笑う。

若林「そのなりでか……度胸は認めよう」
エレン「で、誰を撮るんです？」

若林が前方を指さす。

エレンが前を見る。

○（回想）首相官邸・外観

○（回想）同・首相室・中

薄暗い首相室。

若林が三脚を組み立てる。

エレンがカメラバッグからカメラとフラッシュバルブを取り出す。

若林「平沼騏一郎総理」

エレン「はあ」

若林「元検事で、すぐ切れる人だ」

エレン「たちが悪そう」

若林「直接、話するなよ」

秘書官の声「失礼します」

ドアが開き、モーニングを着た平沼騏

一郎（72）と秘書官が入ってくる。

秘書官「では、撮影に」

若林「はい」

平沼と秘書官がエレンを見る。

秘書官「そちらのご婦人は？」

若林「うちの記者です。今日は彼女が」

エレンが驚いた顔を若林に向ける。

若林が意地悪な笑顔でうなずく。

エレンがむっとした顔をする。

秘書官「それで、総理はどこに？」

エレンが三脚のカメラの先に立つ。

エレン「ここに、お願いします」

平沼がエレンに近づく。

エレンがカメラに戻り、ファインダーを覗く。

○（回想）カメラのファインダー越し

ファインダー越しにぼやけた平沼が立っている。

エレンの声「んーっと」

ぼやけた平沼がはっきりと見える。

平沼のネクタイの首が曲がっている。

○（回想）総理官邸・首相室・中

エレンがカメラから顔を上げ、平沼に声を掛けようとする。

エレンが口に手を当てる。

エレンが秘書官を手で呼ぶ。

秘書官が近づきエレンが耳打ちをする。

秘書官がうなずき、平沼に近づく。

秘書官が平沼のネクタイを直そうとするが、もたつく。

エレンが頭をかきながら平沼に近づく。

若林が手でエレンを止めようする。

エレンが秘書官を押しつける。

エレン「失礼、閣下」

エレンがネクタイの首の部分をつんで、首を絞める。

平沼が顔を真っ赤にして不機嫌な顔をする。

エレンがカメラに戻って、ファインダーを覗く。

エレン「それでは」

若林がエレンの横でフラッシュバルブ

を構える。

音を立ててフラッシュが焚かれる。

○（回想）平沼のポートレート写真

白黒写真の平沼のポートレート。

平沼の表情は不機嫌。

エレンの声「上司は大爆笑だったわ」

○元的美澄高校・地学教室・中

美夢が黒板に平沼の写真を貼る。

美夢「よく怒られませんでしたね」

エレン「元検事だし、それに私は女だから」

美夢「なるほど、殴ったら男がすたと」

エレン「その通り。でも平沼さんに不幸が」

○（回想）新聞一面

見出しに「独ソ不可侵条約締結！」

エレンの声「まさかドイツとソ連がねえ」

美夢の声「ドイツはソ連を敵視してたから」

エレンの声「これで平沼内閣はおジャンに」

○（回想）ニュース映像

「阿部元陸将に大命降下！」の見出し。

首相官邸で写真撮影をする阿部信行

（64）と閣僚たち。

エレンの声「次は阿部さんという方が総理に」

○（回想）首相官邸・外観

エレンの声「ところがこの総理」

○（回想）同・廊下・中

赤い絨毯がひかれた廊下。

阿部が笑顔で小走りに走ってくる。

エレンの声「（笑い）逃げる逃げる！」

阿部の後ろからカメラを持ったエレン

（24）が追いかける。

エレン「逃げないでください！一枚だけ！」

阿部が近くの部屋に入る。

ふてくされるエレン。

○（回想）日本通信同盟ビル・事務所・中

エレンが不機嫌な顔で若林（51）の前に立つ。

若林「すっかり阿部首相に嫌われたな」

エレン「平沼さんから何を聞かされたのか」

若林「でも、困ったな」

エレン「何がです？」

若林「英国の外交団が来るんだ。非公式だが」

エレン「ということは歓迎式典が？」

若林「そう！　そこで特ネタをぜひ！」

エレン「つまり、式典に潜り込めと？」

若林「まあ、正攻法では無理だろうな」

若林が笑う。

若林「そこで秘策を与える」

若林が手で耳をかせとエレンに促す。

エレンが若林に耳を近づける。

○（回想）ホテルニューグランド・外観（夕）

エレンの声「歓迎式典は横浜で行われたの」

○（回想）同・ロビー・中（夕）

ロビーには正装した英国人女性や英国人男性がたむろしている。

エレンの声「そこではおめかしをしてね」
髪を下ろし、ドレスを身につけ、ヒールを履いたエレンがカメラバッグを持って入ってくる。

英国人男性がエレンの肩を叩く。

エレンが驚いて振り返る。

エレンの声「バレたかと思ったの」

英国人男性が親しげにエレンと話す。

エレンが笑顔でうなずく。

エレンの声「でもナンパだったわ。それで」
エレンが男性のエスコートで式典会場の入口に向かう。

入口のスタッフがエレンを止める。

エレンが一瞬、たじろぐ。

スタッフがエレンの胸にリボンをつける。

エレンが会釈をして式典会場に入る。

○（回想）同・歓迎式典会場・中

会場は長テーブルにテーブルクロスがひかれ、イスが置かれている。

上座の上には日章旗と英国国旗が掲げられている。

参加者が席に着いている。

エレンが男性にエスコートされる。

エレンと男性がテーブルにつく。

テーブルについている畑田勝幸（24）がエレンを怪訝な顔で見る。

入口から阿部と使節団長が談笑しながら入ってくる。

阿部と団長がエレンと男性の斜向かいに座る。

エレンの声「何と主賓席だったの！」

スタッフが飲み物を運んでくる。

阿部と団長が立ってグラスを交わす。

エレンがカメラを構える。

エレンの声「すかさず私はカメラを構えて」
フラッシュが焚かれる。

○（回想）日本通信同盟ビル・事務所・中

若林が電話で話す。

若林「出禁？ いや、待ってくださいよ！」

若林の横でエレンが新聞を見る。

新聞には驚いた阿部と笑顔の団長がグラスを交わす写真が載る。

○（回想）新聞一面

「阿部内閣総辞職」の見出し。

エレンの声「ところが阿部さんもすぐに終り」

女子生徒の声「はや！」

エレンの声「でも、これには少し続きが」

○（回想）帝国ホテル・外観（夜）

エレンの声「阿部総理の慰労会が行われたの」

○（回想）同・宴会場・中（夜）

中ではテーブルが置かれ、ビールが並べられている。

参加者が飲んで騒いでいる。

ボーイらが会場内をせわしなく動く。
入口からエレンがやってくる。

エレンの声「なぜか私も呼ばれて」

エレンに背広姿の男性二人が近づき、
無理やりエスコートする。

エレンが阿部の真正面に座らされる。

エレンの前にビールのジョッキが置か
れる。

エレンがジョッキをまじまじと見る。

阿部が笑顔の表情で、手で促す。

エレンの声「がつつり飲むのは実は初めて」

エレンがゆっくりジョッキを掴み、一
口ビールを飲む。

エレンが笑顔になってジョッキを最後
まで飲む。

阿部が手を叩いて喜ぶ。

エレンの隣の人がジョッキをさらに持
ってくる。

エレンがジョッキをあおる。

エレンの声「で、気がついたら……」

エレンが机に突っ伏して眠る。
エレンの顔は赤い。

阿部がエレンの後ろに座っている畑田を呼ぶ。

阿部の手にはカメラが握られている。

畑田が振り返って立ち上がる。

阿部がエレンを指してうなずく。

畑田がエレンを揺さぶる。

エレンが寝ぼけ眼で起き上がる。

阿部がシャッターを切る。

フラッシュが焚かれる。

阿部が嬉々として喜ぶ。

エレンの声「まさに仕返しね」

○元的美澄高校・地学教室・中（夕）

エレンが笑顔で写真を掲げる。

写真には寝ぼけ眼のエレンと迷惑そうな顔をする畑田が写る。

生徒らがクスクス笑う。

エレン「さてさて、この後の話は」

エレンが畑田を指さす。

エレン「私の冒険に欠かせない人物」

美夢「あら！ ひよつとして？」

エレンが微笑む。

生徒が興味深々な顔をする。

チャイムが鳴る。

美夢「あら、残念！」

エレン「気になるこいつは、また明日！」

エレンと美夢が手を振る。

○美澄高校・外観

曇りの空模様。

○同・地学教室前のドア・中

入口の張り紙に「歴史総合・補習二日目」の文字。

○同・地学教室・中

教室にはエレン、美夢、生徒らがいる。

エレンが車いすから背伸びして教室の

後ろを見る。

エレン「あら、あの子？」

美遊「ありや？ 金村君は？」

生徒らが顔を見合わせる。

ドアが開き、金村が入ってくる。

金村「(ぶっきらぼうに) すみません」

美遊「理由は？」

男子生徒A「さっき彼女と喧嘩してた！」

金村「るっせい！」

金村がむくれる。

エレン「まあまあ、どうぞ席に」

金村が仏頂面で後ろの席に座る。

エレン「さて、ではこの男。でもその前に」

寝ぼけ眼のエレンと迷惑そうな顔をす

る畑田の写真を生徒に見せる。

○(回想) 東京・銀座・俯瞰

T「昭和十五年・夏」

○(回想) 日本通信同盟ビル・事務所・中

若林が紙を持ってしゃべる。

エレンの声「中国との戦争は泥沼となった」

事務所の記者らが立って若林（52）を向く。

エレン（25）も立って若林に向く。

若林「わが社も兵隊にとられて人手不足！」

記者「社会部も二人、大陸に行きました……」

若林がエレンを見る。

若林「そこでエレンに社会部もやってもらおう」

記者らがどよめく。

若林「エレン。早速、黙とうの取材、行け！」

エレン「は、はい！」

エレンがカメラを手にして部屋を出る。

○（回想）銀座・交差点・外

背広を着た人や洋装の女性、軍人らが通りを行き交う。

エレンの声「この日は日中戦争から三年目」

エレンがカメラを構えて通りを歩く。

エレンの声「国が戦死した兵隊に黙とうをし

ようと呼びかけた」

エレンが腕時計を見る。

サイレンが鳴る。

エレンが空を見上げ、通りに目を戻す。
人々が行き交う。

エレンの声「でも、みんな知らん顔」

エレンがカメラを構えて右、左を見る。

エレンの声「さあ困った。すると」

エレンが交差点の斜向かいを見る。

斜向かいに海軍将官の服を着ている畑
田（25）が脱帽しようとする。

エレンが交差点を駆ける。

自動車や路面電車が警笛を鳴らし、急
ブレーキをかける。

エレンが交差点を渡り切る。

エレンが息を切らせながら黙とうする
畑田にシャッターを切る。

警官がエレンの後ろからつかむ。

エレンが警官に振り返る。

警官「貴様！ 何やってるんだ！」

エレン「え？ 取材ですよ」

警官「何のだ！」

エレン「黙とうしてる人の」

エレンが振り返る。

畑田が道路を渡ろうとする。

エレン「あ！ ちよつと！」

エレンが近づこうとすると、警官が首根っこをつかむ。

警官「貴様。どこの国だ？」

エレン「あ、いや、に、日本人です」

警官「嘘つけ、あいの子！ ちよつと来い！」

警官がエレンの腕を掴み引つ張る。

エレン「ちよつと！ 離してって！」

通りの人達がエレンと警官を見る。

エレンが警官の手を振り切る。

エレンが畑田に駆け寄る

エレン「ちよつと、海軍さん！」

畑田がエレンを見て驚く。

警官の声「危ない！」

エレンが振り返る。

エレンの眼前にバスが迫る。

エレンが目を瞑る。

衝突音がする。

○（回想）都内の病院・エレンの目線・中（夜）

真つ暗な視界が明け、天井がぼんやり見える。

看護婦の声「気づいたみたい……」

何人かの足音が聞こえる。

○（回想）同・病室・中（夜）

ベッドにエレンが横になっている。

エレンの目が開く。

病室に若林と畑田が入る。

若林「エレン……」

エレンが起き上がる。

エレン「あれ？ 私？」

畑田「バスにはねられたんです」

エレン「あ、ああ……」

若林「警官から逃げようとしたんだって？」

エレン「違います！ 取材してただけです」

畑田「取材？」

エレン「黙とうの！」

若林が写真を取り出す。

畑田がそれを見る。

○（回想）畑田の白黒写真

畑田が通りで脱帽して黙とうする姿が写っている。

通行人が意に介さず歩くのが脇に写る。

○（回想）都内の病院・病室・中（夜）

畑田が写真を注視する。

畑田「ああ、なるほど。うまいですね」

エレン「警官も黙とうするべきなのに！」

畑田「異人を見ると、警戒するのよ」

エレン「私は日本人です！」

若林「エレン！ 命の恩人だぞ！」

エレンが驚いた顔をする。

エレン「す、すいませんでした」

畑田が苦笑いをする。

畑田「申し遅れました。畑田勝幸です」

エレン「初めまして。鈴峰エレンです」

畑田「二回目ですよ」

エレン「は？」

畑田「阿部総理の慰労会で」

畑田がビールを飲む仕草をする。

畑田「いやあ、潰れたあなたを負ぶったのは」

エレン「重かったってかー!」

エレンが畑田に掴みかかろうとする。

医者「お静かに!」

医者が不機嫌な顔をして中に入る。

エレンの動きが止まる。

医者「これだけ元気なら問題ないですね」

若林「明日から仕事でも?」

医者「ええ。かすり傷程度ですし」

若林「というわけで、エレン」

エレン「はい?」

若林「あしたから陸軍省も兼ねろ」

エレン「はい?」

若林「こいつ陸軍に出向の海軍さんだそうだ」

エレン「えっと、つまり？」

畑田「海軍なのに陸軍省勤務」

エレン「ああ、左遷ね」

畑田がエレンを睨む。

エレンが舌を出して笑う。

若林「仲良くやりなさい、ほら」

若林がカメラバッグを差し出す。

○（回想）陸軍省・外観（夕）

エレンの声「数日後、取材のため陸軍省を訪れた。ところが」

○（回想）同・正門・外（夕）

スカート姿のエレンと衛兵がにらみ合っている。

衛兵「帰れ！ 大臣はお会いにならない！」

エレン「許可は得てます！」

エレンが許可証と身分証を見せる。

衛兵が手でエレンを追い払う。

衛兵「ダメだ！ 帰れ！」

エレンが衛兵を睨んで離れる。

○（回想）通りの街頭（夜）

街灯が灯り始める。

エレンの声「何かあると思った。そこで」

○（回想）陸軍省・道路側の塀・外（夜）

エレンが塀沿いに歩く。

塀を見上げるエレン。

エレンが両手に江戸っ子みたいに唾を飛ばす。

エレンが塀をよじ登る。

○（回想）同・陸軍省敷地側の塀・外（夜）

エレンが塀から顔を出す。

エレンが左右を見る。

人は誰もいない。

エレンが塀を乗り越上げて、敷地側に体を移す。

畑田の声「(小声) おい！」

エレン「えひゃ！」

エレンが足元を崩し塀にぶら下がる。

畑田がエレンの下に来る。

畑田「(小声) 何やってんだ！」

エレンが片手でスカートに手を当てる。

エレン「(小声) 見えちゃう！ あっち行け！」

畑田「(小声) 危ないって！」

衛兵の声「誰だ！」

エレンに向かってライトが当てられる。

エレン「うわ！」

エレンが手を離してしまう。

エレンが尻もちをつく。

サイレンが鳴る。

憲兵らが表に出てくる。

憲兵の声「不審者だ！ 発砲を許可する！」

畑田がエレンの体を起こす。

畑田「走れるか？」

エレンが小刻みにうなづく。

エレンと畑田が建物の中へ駆け出す。

一発の発砲音がする。

エレンの右太ももに命中する。

エレン「いっ！」

エレンの体が崩れる。

畑田がエレンを負ぶさって中に入る。

○（回想）同・備品室・中（夜）

中は電気が消えている。

畑田がエレンを背負って入る。

畑田が部屋の隅にエレンを降ろす。

エレン「いった！」

畑田がエレンの右太ももを見る。

エレンの右太ももから出血している。

畑田が近くの棚から布巾を掴み、応急

処置をする。

畑田「じっとしてろ」

エレンがうなずく。

畑田が毛布を取り出しエレンに被せる。

畑田「（小声）動くなよ！ 息を殺せ！」

エレンが毛布越しにうなずく。

○（回想）同・正門・外（夜）

黒塗りの自動車が中に入る。

衛兵が敬礼する。

○（回想）同・備品室・中（夜）

電気が消えたままの部屋。

エレンが毛布をかぶって動かない。

二組の駆け足の音が聞こえる。

憲兵Aの声「誰かいるか！」

憲兵Bの声「調べろ！」

ドアが荒々しく開く。

憲兵二人が短銃を構える。

憲兵二人がゆっくり中に入る。

憲兵A「なんだ、あの毛布？」

憲兵Bが毛布越しのエレンに近づく。

憲兵Bが短銃を突き付ける。

米内の声「おい、君達」

憲兵二人がドアに振り返る。

背広姿の米内光政（60）が立っている。

憲兵A「誰だ！ 貴様！」

米内「総理の顔も知らんのか？」

憲兵二人が直立不動の姿勢をとる。

憲兵A・B「失礼いたしました！ 米内閣下」

米内「賊か？」

憲兵A「はっ！」

憲兵B「目下、捜索中であります！」

米内「なら、もう外だろ。非常線張れ！」

憲兵A・B「はっ！」

憲兵二人が駆け足で外に出る。

米内が辺りをうかがって、中に入る。

米内が毛布越しのエレンに近づく。

米内「いるんだろ？」

毛布越しのエレンは動かない。

米内「大丈夫。畑田から聞いた」

エレンが毛布を脱いで驚いた顔で米内を見る。

米内「（笑い）なるほど、面白そうな娘だ」

エレン「……なぜ、総理が？」

米内が笑う。

米内「それはおいおい。立てるか？」

エレン「どこへ？」

畑田の声「海軍病院へ」

畑田が米内の後ろから現れる。

畑田がエレンを背負う。

○同・正門・外（夜）

黒塗りの自動車が出てくる。

○同・海軍病院・外（夜）

○同・病室・中（夜）

エレンがベッドに横になっている。

右太ももには包帯が巻かれている。

畑田が心配そうにエレンを見る。

ドアがノックする音。

畑田「どうぞ」

ドアが開き、若林が入る。

畑田「……すいません」

若林「いや、君のせいじゃない」

畑田「しかし、この騒動のおかげで」

若林「何か掴んだんだね？」

畑田がうなずく。

畑田「陸軍は次の総理を探してます……あの」

若林「何だい？」

畑田「これ以上、エレンの単独行動は……」

若林が苦笑いをする。

若林「そうだな……危険だな」

畑田と若林がエレンを見る。

○（回想）新聞の輪転機

見出しに「畑陸軍大臣、単独辞職！」

畑俊六の写真が載る。

別の新聞の見出しに「米内内閣瓦解！」

米内光政の顔が載る。

○（回想）海軍病院・病室・中（朝）

エレンが新聞を読む。

若林の声「おはようさん」

背広を着た若林と畑田が入ってくる。

エレン「（不機嫌に）おはようございます」

若林「足はどうだ？」

エレン「痛みは引きました」

若林「そうか……それ、読んだか？」

エレン「ええ」

若林「やれやれ、陸軍のやりたい放題だな」

畑田「軍部が大臣出さないと内閣不成立」

エレン「それも陸軍が仕組んだこと」

三人がため息をつく。

若林「エレン」

エレン「はい」

若林「しばらくこいつと組め」

若林が畑田を示す。

エレン「はー？」

若林「こいつ、陸軍省追い出されてな」

畑田「海軍省に出戻りなんだけど」

若林「仕事がないらしいんだ。なら護衛にと」

エレン「嫌ですよ！ お目付け役でしょ！」

若林「命令だ！ しばらくは海軍省付きに！」

畑田「お守役です。よろしく！」

エレン「お守？ うがー！」

エレンが新聞を引き裂き、宙に投げる。
大衆の歓声上がる。

T「昭和十五年・秋」

○（回想）ドイツ映画「民族の祭典」

ベルリンオリンピックの記録映画。

日本人選手が競技する映像。

アドルフ・ヒトラーが映る。

○（回想）東京劇場・劇場・中

スカート姿のエレンと畑田が観客席に
座る。

劇場の観客が歓声と拍手で沸く。

畑田がエレンの横顔を見る。

エレンがうんざりした顔をする。

○（回想）蕎麦屋・外観

○（回想）同・店内・中

中には数人の客がいる。

エレンと畑田が向かい合って座る。

エレンがペンを持ってぺら紙の前で唸っている。

エレンの眉間にしわが寄る。

それを見て畑田が笑う。

エレンが畑田を睨む。

エレン「何よ！」

畑田「お、怒るなよ」

エレン「何でナチス映画の記事なんて」

畑田「映画は好きだと聞きましたか？」

エレン「私はロマンスが好きなの！」

畑田「（軽口で）春、南方のローマンス」

エレンが畑田を睨んで、ぺら紙を隠す。

エレン「あーあ！ 米内さんが倒れたとたん」

エレンがぺら紙を畑田に見せる。

ぺら紙にはムッソリーニとヒトラーと

近衛文麿が手を組んだ絵。

畑田「それ、時間の問題だろうな」

エレン「陛下ならこんなバカしないわ！」

エレンがぺら紙を乱暴に丸める。

畑田「お前さ」

エレン「何よ？」

畑田「いい加減にしろよ」

エレン「何言ってるのよ」

畑田「俺ら海軍だって、色々と」

店員の声「お待たせしましたー！」

店員がカツ丼と天ぷらそばを持ってきて、エレンと畑田の前に並べる。

エレンがカツ丼を食べる。

エレンが不味そうな顔をする。

畑田「どした？」

エレンが箸でカツ丼の米の部分をもくもく上げる。

白米に混じって、切ったそばが見える。

エレン「それでもやる気？」

畑田が不満げな顔で蕎麦をする。

○（回想）銀座・俯瞰（夕）

ネオンがちらほらつき始める。

○（回想）ダンスホール「栄華」・入口（夕）

入口にネオンが輝く。

若い男女が店の中に入っていく。

店の前をエレンと畑田が通りかかる。

エレンが足を止める。

エレン「ねえ」

畑田「いやだよ」

エレン「何も言っていないけど」

畑田「俺は下手なの！」

エレンが吹きだし笑いをする。

エレン「自分から言うかね」

エレンが笑う。

畑田がガックシする。

エレン「ほら！ 行くよ！」

エレンが畑田を無理やり連れてダンス
ホールの中に入る。

○（回想）同・ホール内（夕）

ホール内では若い男女が組になって踊
っている。

エレンと畑田も踊るが、畑田の足取りが悪い。

美夢の声「戦前にもあったんですね」
エレンの声「そう。楽しかったわ！」

○（回想）銀座の通り・外（夜）

通りの店舗の照明は消えている。

エレンと畑田がフラフラして歩く。

畑田「あー！ うまいんだな、エレン！」

エレン「ふふん！ でも日本仕込みよ」

畑田「足、大丈夫か？」

エレン「平気！ 平気！」

エレンと畑田が笑い出す。

エレンが辺りを伺う。

エレン「飲みたい！」

畑田「どこで？ 店はもう……」

エレンが笑って畑田の手を引く。

○（回想）日本通信同盟ビル・外観（夜）

○（回想）同・事務所・中（夜）

中のソファ―に畑田が座る。

エレンがお盆に酒瓶とグラスを乗せてくる。

畑田「お！」

エレン「（怪しい笑い）若林さんの」

畑田「大丈夫か？」

エレンが机にお盆を置き、グラスに酒を注ぐ。

エレン「いいって、いいって」

エレンがグラスを畑田に差し出す。

畑田が笑って受け取る。

エレンがグラスを上げる。

エレン「では」

畑田がグラスを上げる。

エレン・畑田「カンパ―！」

二人がグラスを交わす。

畑田が一気におおる。

畑田「ふう！　うまい！」

畑田がグラスをエレンに差し出す。

エレンがグラスに酒を注ぐ。

畑田がグラスの酒をあおる。

エレン「ちよつと！ 早いわよ！」

畑田「そうか？」

エレン「そうよ……」

エレンがグラスの酒を一口飲む。

エレン「ねえ、今更なんだけど」

畑田「何だ？」

エレン「何で陸軍省にいたの？」

畑田「うーん……」

畑田がグラスを置く。

エレン「溜まってるんでしょ？ 不満顔よ」

畑田「あ、ああ」

エレン「なら吐き出さなきゃ！」

畑田が苦笑いをする。

畑田「平たく言えば、海軍のスパイとして」

エレン「陸軍の動向を探れと」

畑田がうなずく。

畑田「米内閣下の命令でね」

エレン「あれ？ でも海軍の服着てたら」

畑田が大笑いする。

畑田「そう！ バレバレ！」

エレン「（笑い）それってさ」

畑田「何だ？」

エレン「陸軍も海軍省に？」

エレンが酒瓶に手を伸ばす。

畑田「もちろん！ だからお互い様」

畑田がソファーに乱暴に深く座る。

エレン「なんだか狐と狸の化かし合いみたい」

畑田「まあ、お互いに牽制はできたけどな」

エレンがグラスに酒を注ぐ。

畑田がグラスに手を伸ばし、一口飲む。

エレンが怪訝な顔をする。

畑田「何だ？」

エレン「何で海軍に？」

畑田「ん？」

エレン「なんか、軍人っぽくないっていうか」

畑田「飯付き、家付き、俸給付き」

エレン「へ？」

畑田「俺は貧乏でね」

エレン「俺？　うちじゃなくて？」

畑田「鋭いね。身寄り無し」

エレン「ご、ごめん……」

畑田「いいよ。おかげでタダの兵学校に」

エレン「エリートだったんだ！」

畑田「今もですけど？」

エレンが誤魔化し笑いをする。

エレン「もしかしたら、ホントは大学に？」

畑田が困った顔をして頭をかく。

畑田「負け惜しみかもしれないけど」

畑田がグラスを机に置く。

エレンが酒を注ぐ。

畑田「今の政治家や官僚見ると」

エレン「頼りないと？」

畑田が唸り声を上げる。

畑田「陛下のご意思、分かってないんじゃない？」

畑田が酒をあおる。

畑田「なら、船で大暴れをとね」

エレン「どんな船？」

畑田が見上げる。

畑田「そりゃあ、これからは空だよ！」

エレン「じゃあ航空母艦だ」

畑田「今に九九式やゼロ戦が空高く舞うさ！」

エレン「大和は？　すごいじゃない？」

畑田が笑って手を振る。

畑田「時代錯誤だ！　あんなの」

エレン「ほんと、海軍とは思えぬ発言」

畑田「戦艦バカは空の恐ろしさ、知らんのよ」

畑田がテーブルのグラスを見る。

グラスは空っぽのまま。

畑田「あれ？」

エレン「そろそろやめときな」

畑田がエレンに身を乗り出す。

畑田「君はなんでここに？」

エレン「え？」

畑田「君ならアメリカでも」

エレン「……中途半端じゃん。合いの子だし」

畑田「でも、向こうの方がいい仕事か？」

エレン「私は一番乗りがしたいの！」

畑田が首を傾げる。

エレン「日本最初の婦人カメラマン！」

畑田「アメリカは？」

エレン「とつくの昔にいます」

畑田「そつか……それで日本に残った？」

エレン「ええ。それにもう一つ野望が」

エレンがグラスに酒を注ぐ。

畑田「何だい？」

エレン「(笑い) 秘密！」

エレンがグラスをあおる。

畑田「なあ、もう一杯くれよ」

エレン「えー」

エレンがテーブルを見る。

グラスと酒瓶は空っぽ。

畑田「頼むよ……」

エレン「(ため息) しょうがないなあ」

エレンが立ち上がり、部屋を出る。

畑田が近くに置いてある新聞を見る。

畑田が新聞を手に取り、ソファーに寝
っ転がって紙面を見る。

エレンが酒瓶を持って戻ってくる。

畑田が新聞を顔に当てたまま、寝息を立てて寝る。

エレン「全く」

エレンが畑田から新聞を取る。

○（回想）新聞一面

一面の見出しに「三国協定・提携強化」の文字。

新聞をめくると、別の見出し「全政党建党・新体制樹立へ邁進！」の文字。

○（回想）日本通信同盟ビル・事務所・中（夜）

エレンが苦い顔をして、新聞をめくる。

エレン「お？」

エレンが新聞に顔を近づける。

○（回想）新聞一面

紙面には「皇紀二六〇〇年・祝賀大会迫る！」の見出し。

○(回想) 日本通信同盟ビル・事務所・中(夜)

エレンが新聞をたたんで、腕を組んで考える仕草をする。

エレンがデスクについて、ぺら紙とペンを取り出し書き始める。

○(回想) 同・外観(朝)

○(回想) 同・入口・外(朝)

上着を脱いだ畑田がビルを仰ぎ見る。

○(回想) 同・事務所・中(朝)

エレンがデスクに突っ伏して眠る。

エレンの体に背広の上着がかけられている。

エレンの声「この後、日独伊の三国軍事同盟が成立した」

○元的美澄高校・地学教室・中(夕)

美夢が黒板に「日独伊三国軍事同盟」

と書く。

エレン「その後、ダンスホールは閉鎖」

生徒らが「えー」と声を上げる。

女子生徒Cが手を上げる。

エレン「どうぞ」

女子生徒C「あの、祝賀会って？」

エレン「皇紀祝賀会のことね」

女子生徒C「はい、これって？」

エレン「これは代々の天皇陛下がこの国を治めて二六〇〇年目がこの年だったの」

生徒らが驚きの声を上げる。

エレン「まあ、政府が作ったお祝いだから」

エレンが苦笑いをする。

美夢「国のムードを高める政策だね」

エレン「そこで私は野望を叶えるべく企みを」

美夢「も、もしかして畑田さんとも急接近？」

チャイムが鳴る。

エレン「あら、時間。明日はクライマックス！」

女子生徒B「起立！」

生徒達が起立する。

○美澄高校・外観（朝）

雨模様。

○同・地学教室・中（朝）

教壇に美夢が立っている。

車いすに乗ったエレンが横にいる。

エレン「では、いよいよクライマックス」

女子生徒A「二人の愛の行方は！」

美夢「こら！ 歴史総合の補習よ」

生徒らが笑う。

エレン「皇紀祝賀会からですね」

美夢が「昭和十五年・秋」と板書する。

エレン「戦争前のお祭り騒ぎ！」

男子生徒B「お祭り？」

エレン「ええ。みんな飲んだわよー」

生徒らが笑う。

エレン「でも、陛下の声は聞こえなかった」

エレンが遠い目をする。

○（回想）ぺら紙の企画書・表紙

表紙に「皇国の意志を問う！」の文字。

○（回想）日本通信同盟ビル・事務所・中

若林（52）がぺら紙を持って頭をかく。

エレン（25）が若林の前に立つ。

若林「何がしたい？ エレン」

エレン「……陛下の本心を知りたいんです！」

若林が小さく顔を横に振る。

エレン「どうしてダメなんです！」

若林「君の立場、考えろ！」

エレン「新聞記者です！」

若林「じゃあ聞くが、誰に取材をするんだ？」

エレン「そりゃあ、陛下の忠臣ですから」

若林「総理に閣僚だろ？」

エレン「はい」

若林「官邸は出禁だ。陸軍には睨まれてる」

エレンが渋い顔をする。

若林「……海軍も守り切れないぞ！」

エレン「なら死刑覚悟で陛下に直接！」

若林が深くため息をつく。

若林「……君は日本が好きか？」

エレン「はっ？ 何をいまさら」

若林「なら……今はじっとしてろ」

エレン「嫌です！ これはやります！」

若林「なら条件を出そう」

エレン「どうぞどうぞ」

若林「もし陛下の本心が聞けなければ」

若林がエレンに顔を近づける。

若林「君は親のいるアメリカに帰れ！」

エレンが真っ赤になって怒りの表情になる。

エレン「上等だ！ 必ず持ってきてやる！」

エレンがカメラバッグを持って部屋を出る。

若林がエレンを見送り、ため息をつく。

○（回想）上野動物園・外観（夕）

○（回想）同・ゾウの広場・外（夕）

ゾウの柵の前でエレンがたそがれる。

ゾウは広場の中央で横になる。

エレンがカメラをゾウに向ける。

エレン「動けよー」

エレンが柵を乗り越えようとする。

畑田の声「こらこらこら！」

畑田の手がエレンの首根っこを掴む。

エレンが振り返る。

背広姿の畑田（25）が立っている。

畑田「若林さんとやり合ったって？」

エレン「何よ。笑いに來たの？」

畑田「そういうつもりはないよ」

エレンが畑田の手を振り払う。

エレン「なんでここにいてるって分かったの？」

畑田「いや、まあ」

エレンがジト目で畑田を見る。

エレン「……尾行ね」

畑田が苦笑いをする。

エレン「それじゃ、事の顛末も知ってるよね？」

畑田「首相から大臣から全部断られた」

エレンが小さくうなづく。

畑田「……ちよつとは頼ってくれよ」

エレン「あんたの貸しは高くつくのよ！」

畑田「なら、山本司令の取材は断っていいな？」

エレンが驚いた顔を畑田に向ける。

畑田がうなづく。

エレン「……いいの？ 何か下心が？」

畑田「無いよ！ 断ってもいいんだぞ！」

エレン「ごめん、ごめん！ で、どこで？」

畑田「それがね……」

畑田が頭をかく。

○（回想）浅草浅草寺・外観（夜）

○（回想）神谷ビル・外観（夜）

三階建てのビルディング。

○（回想）同・店内（夜）

テーブル席が並ぶ店内。

店内はやや混んでいる。

奥にエレンと畑田が座る。

山本の声「よう！ お待たせ」

背広姿の山本五十六（56）がエレンらにやってくる。

エレンと畑田が立ち上がる。

エレンと畑田が深々と頭を下げる。

山本「いいって。さあ」

畑田「こちらへどうぞ」

エレンが山本を上座に案内する。

山本が座り、エレンと畑田も座る。

○（回想）神谷ビル前の通り・外（夜）

酔っぱらいの男性二人が肩を組み「愛
国行進曲」を荒々しく歌う。

○（回想）神谷バー・店内（夜）

山本が笑う。

山本「そうか。陛下のお心をね……」

エレンがグラスをあおる。

エレンの顔は赤い。

エレン「今の日本を、陛下は望んでいるのか」

エレンの隣の畑田が呆れた顔をする。

山本「君は陛下をどう思うんだい？」

エレン「神様なんでしょうけど……」

畑田「何だ？」

エレン「リアリストのはずです」

山本「お！ 何だい、そりや？」

山本が身を乗り出す。

エレン「陛下は昔、英国に視察に行ってます」

山本「うん」

エレン「あの国力を知る神様が、戦をするであらうかと……」

山本が笑いながらうなづく。

山本「うん。俺もそうだ。そう思う」

畑田が感心した顔をエレンに向ける。

エレンが勝ち誇った顔をする。

畑田「長官もイギリスに行ってましたよね」

山本がうなづく。

山本「ところで、俺に何を聞きたいんだい？」

エレン「ま……万一ですよ」

山本「ん？」

エレン「米英と一戦となりそうなき」

山本「ああ。まあ、作戦の立案は俺だな」

エレン「あ、いや……」

畑田「何だよ」

エレン「陛下にも作戦の説明を？」

山本がうなづく。

山本「陛下はお納得なされんだろうが……」

山本がグラスをあおる。

山本「嫌だが、俺も軍人だ！」

エレン「へっ？」

山本「やれと言われれば、やるだけだ」

山本が寂しそうな顔をする。

山本「陛下が納得されんでも」

畑田「御前会議で決定されれば……」

山本が小さくうなづく。

山本「さあさあ！ 楽しく飲もうよ！ な？」

エレン「こうなりや、やけだ！」

畑田が苦笑いをする。

○（回想）同・店先・外（夜）

店から千鳥足のエレンとそれを支える

畑田が出てくる。

エレンは上機嫌の様子。

後ろから山本が出てくる。

エレンが畑田に寄りかかる。

畑田「お、おい！　ちゃんと立て！」

山本がエレンと畑田を見て微笑む。

山本「畑田」

畑田「はい？」

山本「この娘は思った以上に手強いぞ」

畑田「はい？」

山本「バルチック艦隊よりも大変だ！」

畑田が苦笑いをする。

エレン「(酔い口調) 何よ！　失礼な！」

エレンが畑田を足蹴りする。

山本が二人を笑顔で眺める。

山本「それじゃあ、ちゃんと送れよ」

畑田「はっ！」

畑田が敬礼する。

エレン「では長官！」

エレンが不格好な敬礼をする。

山本が笑顔で手を振ってエレンと畑田から離れる。

畑田が山本の背中を見送る。

エレン「(酔い口調) おんぶ！」

畑田が頭を抱えてため息をつく。

畑田「あー、ほれ！」

畑田がエレンをおんぶする。

○(回想) 皇居沿いの堀の通り・外(夜)

通りは閑散としている。

畑田がエレンを背負って歩く。

エレンは酔って上機嫌な様子。

畑田が足を止め、皇居を見る。

エレン「どした？」

畑田がエレンに振り返る。

畑田「あの中」

エレン「ん？」

畑田「入りたいか？」

エレン「そりゃあ！ ぜひ陛下のお声を！」

畑田が苦笑いをする。

エレン「どしたの？ 急に？」

畑田「いや、俺も聞いてみたいなと」

エレン「あら！ どしたの？」

畑田「エレンのいう通り」

エレン「ん？」

畑田「陛下のお気持ちが見えてこない」

畑田がさめた笑いをする。

畑田「わりい。ちよつと休憩」

畑田がエレンを降ろす。

畑田がその場に座り、皇居を見る。

エレンが隣に座る。

エレン「どうしたのよ？ 急に」

エレンが畑田の肩を叩く。

畑田「長官って」

エレン「うん？」

畑田「下戸で有名なんだよ」

エレン「え！」

畑田「……なんか、あつたのかなあと」

エレン「何があつたと思う？」

畑田「多分……作戦の立案」

エレン「……アメリカと？」

畑田が小さくうなずく。

畑田が真顔でエレンを見る。

畑田「エレン。雑感ならこれで書けるんじゃない？」

エレン「だめよ。全然核心に迫ってない」

畑田「なら、アメリカに帰るかい？」

エレン「な！」

エレンが怒りの表情をする。

エレン「（大声） 帰るって、私は日本人よ！」

畑田が慌ててエレンの口を手で塞ぐ。

エレンが畑田の手を剥がそうとする。

エレン「（大声） 私は日本で学んだの！」

畑田「わりい！ 静かに」

エレン「（大声） 私の居場所はここなの！」

畑田「静かになって！」

エレン「（大声） 私は！ 私の心は！」

畑田がエレンに口づけをする。

エレンの動きが止まる。

畑田がエレンの口から離れる。

エレンが顔を真っ赤にする。

エレン「な！ 何すんのよ！」

畑田「君の心は？」

エレンが口を開けるが、閉じる。

畑田「……分かったよ。お礼に中へ」

エレン「どこの？」

畑田「あの奥へ、一緒に」

畑田が皇居を見る。

エレンも見る。

エレンの声「話は決まった」

○元的美澄高校・地学教室・中（夕）

生徒らの視線がエレンに集中する。

女子生徒A「ダイタン！」

女子生徒B「それ、死語」

生徒らが笑う。

エレンが微笑む。

エレン「多分、あいつは察したのよ」

男子生徒B「察した？」

エレン「アメリカとの戦争が目の前だと……」

エレンが窓の方を遠い目で見る。
遠くから雷鳴が聞こえる。

生徒がエレンの顔を怪訝に見る。

チャイムが鳴る。

美夢が腕時計を見る。

美夢「あ……」

エレンも腕時計を見る。

エレン「あら……時間」

美夢「うーん、どうしましょ？」

エレンと美夢が生徒の方を見る。

生徒らが恨めしそうにエレンらを見る。

エレン「まあ、ここで終わると」

雨が降り出す音。

金村の声「提案があります」

金村が手を上げる。

美夢「どうぞ」

金村「ぜひ続きを！」

生徒らが賛同の声を上げる。

エレン「いいかしら？」

美夢「(笑い) 金村くんが言うのなら」

エレンがうなずく。

エレン「あの日から数日後に……」

黒電話の鳴る音。

○（回想）日本通信同盟ビル・事務所・中

エレン（25）がデスクでカメラを磨いている。

奥の机で若林（52）が電話を受ける。

若林「エレン」

若林が受話器をエレンに差し出す。

エレンが立ち上がり受話器を受け取る。

エレンの声「あいつからだった」

美夢の声「どんな内容だったんです？」

エレンの声「枢密院へ出頭せよと」

男子生徒の声「枢密院？」

○（回想）皇居・堀沿いの道路・外（夕）

雨模様。

黒塗りの自動車が走ってくる。

エレンの声「天皇陛下の諮問機関」

美夢の声「陛下が国政について質問する所よ」
エレンの声「そして、そこは皇居の中」

○（回想） 走行中の自動車内（夕）

エレンと畑田（25）が後部座席に座る。

エレンは正装、畑田はモーニングを着ている。

エレンの膝にはカメラバッグが置かれている。

畑田の膝には小さめの木箱が二つ置かれている。

畑田がエレンを見る。

エレン「何？」

畑田「いや、まともな恰好でほっとした」

エレン「それくらいの常識は持ってます！」

畑田「いや、失敬」

エレン「ところで枢密院の誰に会うの？」

畑田「鈴木貫太郎。副議長してる」

エレン「海軍の出？」

畑田「ああ」

エレン「つてことは、ツテ？」

畑田「当然。米内閣下に無理言って」

エレン「やるじゃん！ 米内」

畑田「閣下つけろ」

運転手の声「門に入ります」

エレンと畑田が前を見る。

○（回想） 皇居・桔梗門・外（夕）

黒塗りの自動車が門をくぐる。

○（回想） 枢密院・外観（夕）

○（回想） 同・応接室・中（夕）

枢密院職員が入ってくる。

その後にエレンと畑田がついて入る。

枢密院職員「こちらでお待ちください」

エレン・畑田「ありがとうございます」

枢密院職員が出ていく。

エレンが部屋の窓に向かう。

畑田が窓に近づき外を指さす。

畑田「こっちは皇宮警察」

畑田が別の方を指さす。

畑田「んで、あっちは近衛師団」

隊列が行進する足音が聞こえる。

エレンが音の方に顔を向ける。

兵が行進するのが見える。

畑田「下手なことすれば」

エレン「ズドン……か」

畑田「クーデター以来、気が立ってるのよ」

畑田がソファアに戻る。

畑田「ま、変なことはしなさんな」

エレン「ちよっと！」

エレンが畑田に近づく。

エレン「お礼は！」

エレンが顔を赤くして唇を指さす。

畑田が苦笑いをする。

畑田「中に入るとしか言っていない」

エレン「なっ！」

畑田「嘘は言ってませんよ」

畑田がニヤニヤ笑う。

エレンが拳を上げる。

畑田が両手でエレンをなだめる。

畑田「ちゃんと策はあるってば」

エレン「全く」

畑田「それと」

エレン「何よ？」

畑田「鈴木さんに婚約者の紹介と言ってる」

エレン「（大声）は？」

エレンが顔を真っ赤にして怒りの表情。

畑田「あれと合わせての策だ！」

畑田がテーブルにある二つの木箱を指さす。

畑田「いい酒だけど、エレンは飲むな」

エレンが不満げにうなづく。

畑田「あと、話合わせろ」

エレンがうなづく。

ドアがノックする音。

枢密院職員の声「失礼します」

ドアが開き、枢密院職員と鈴木貫太郎（72）が入ってくる。

エレンと畑田が鈴木に頭を下げる。

鈴木「いいよ。楽になさい」

エレンと畑田が頭を上げる。

鈴木「君はいいよ」

枢密院職員「はい？」

枢密院職員が訝しげな顔をする。

鈴木が枢密院職員に耳打ちする。

鈴木「（大声）海軍の人間だ！ 心配いらん！」

枢密院職員が耳を塞ぎ、部屋を出る。

鈴木が畑田を見る。

鈴木「すまん！ 家に帰れなくて」

畑田「いえ、いろいろ微妙な時局ですから」

鈴木が静かに笑いうなずく。

畑田「えっと、婚約者です」

エレン「鈴峰エレンです！」

鈴木が笑う。

鈴木「なるほど。面白そうな子だ」

鈴木が手でソファーに促す。

エレン、畑田、鈴木がソファーに座る。

畑田「手ぶらでは何ですので……」

畑田が二つの木箱のふたを開ける。

鈴木が箱を覗き込んで笑う。

エレンが横から見る。

鈴木「良く手に入ったな」

鈴木が箱から葉巻を手にする。

畑田「これは、山本大将から」

畑田が別の箱から酒瓶を取り出す。

鈴木「そうか、あいつ飲まんからな」

鈴木が満足な顔をして酒瓶を取る。

○（回想）同・外観（夕）

建物に明りが灯る。

○（回想）同・応接室・中（夕）

エレン、畑田、鈴木が楽にして座る。

鈴木は上着を脱ぎ、グラスをあおる。

机には灰皿と火のついた葉巻がある。

鈴木の顔は赤い。

鈴木「なあ、エレンさん」

エレン「はい」

鈴木「こいつな、兵学校で睨まれたんだ」

畑田「やめてくださいよ」

鈴木「兵学校で『大和は時代遅れだ！』って

エレンが笑う。

鈴木「国の名誉を汚す発言だ」

畑田「事実じゃないですか」

鈴木が手で畑田を制す。

鈴木「火消しに大変だったんだぞ」

エレン「よく退学にならずに……」

鈴木「まあ、こいつの生まれがな、ここの」

畑田「閣下、それは……」

鈴木が畑田を見て、小さくうなづく。

エレンが怪訝な顔をする。

鈴木「いや、まあ米内や山本がかばってな」

畑田「おかげで艦隊勤務から外れました」

鈴木がうなづく。

鈴木「でも、助かった」

畑田「助かった？」

エレン「それって陸軍省への？」

鈴木が大きくうなづく。

鈴木「君が陸軍で邪魔しなかったら」

エレン「もつと早く同盟が？」

鈴木がうなずく。

鈴木「急に悪くなっていただろう」

鈴木がエレンを見る。

鈴木「エレンさん！」

エレン「は、はい」

鈴木「こいつはエー男よ！ 頼んます！」

エレンが笑ってうなずく。

エレン「はい！」

鈴木が畑田を見る。

鈴木「畑田！ 守ってやれよ！」

畑田「はっ！ はい！」

鈴木「(ご機嫌に) 久々に、いい気分だー」

鈴木がグラスを置き、ソファーに横になる。

畑田「鈴木閣下」

畑田が立ち上がり鈴木に近づく。

畑田「閣下、風邪ひきますから」

鈴木が振り払い、いびきをかく。

畑田「閣下、閣下！」

畑田が鈴木を揺さぶる。

鈴木が眠ったまま寝息をたてる。

畑田が腕時計を見る。

畑田「一時間か……ちよつとかかったな」

エレン「え？」

畑田がエレンに笑顔を見せる。

畑田「強めの酒だったからな。高くついた」

エレン「(笑い) 自腹だったんだ」

畑田「大和より、いい値段かも」

エレン「(笑い) それより大丈夫？」

畑田「いいだろ」

畑田が応接室の机を漁る。

畑田「あった」

畑田が小さな紙を取り出す。

エレンが横から紙を見る。

エレン「(小声) 地図だ！」

エレンがカメラバッグを肩から下げる。

エレン「行こう！」

畑田「おう！」

エレンと畑田が部屋を出る。

○(回想) 同・正面入口・外(夕)

雨はやんでいる。

入口からエレンがそつと顔を出す。

畑田がエレンの肩を叩く。

エレンが驚く仕草をして畑田を見る。

畑田「堂々としてろ」

エレン「そんなことしたら」

畑田「大丈夫だから」

畑田がポケットからリボンを取り出す。

畑田がエレンの胸にリボンをつける。

畑田「阿部さんの時と同じやり方」

エレンが笑ってうなづく。

畑田「もし人に出くわしたら」

エレン「分かった。任せて！」

エレンがバッグから洋書を取り出す。

畑田が表紙を見る。

畑田「バイオ……なるほど」

エレン「陛下は生物学の大家よ」

エレンが畑田と並ぶ。

畑田「（小声） ばか！ 後ろに」

エレンがむっとしながら畑田の少し後ろに付く。

畑田が歩き、少し後をエレンが歩く。

○（回想） 皇居内・敷地・外（夕）

敷地内は木々が多く暗い。

大きな道を畑田が歩き、その後ろにエレンがつく。

エレン「（小声） ねえ？」

畑田「（小声） なんだ？」

エレン「（小声） 写真、ダメ？」

畑田「バカ！」

畑田が慌てて手を口に当て辺りを見る。

畑田の前から近衛兵二人が歩いてくる。

畑田「（小声） 来たぞ！」

エレン「（小声） 大丈夫よ！」

近衛兵二人が畑田の前に立つ。

近衛兵「失礼ですが、どちら様で？」

畑田「生物学の方です」

畑田がエレンを見る。

エレン「生物博士のエレン・パスツールです」

エレンがスカートの裾を持ち挨拶する。

近衛兵二人が顔を見合わせる。

畑田「では、ごきげんよう」

エレン「ご、ごきげんよう……」

畑田が近衛兵二人に頭を下げ歩き出す。

エレンが後を付いていく。

近衛兵二人が口を開けたまま見送る。

畑田が前を向いたまま口を開く。

畑田「（小声） 振り返るなよ」

エレンが歩きながら小さくうなづく。

○（回想）同・生物学研究所の敷地・外（夕）

畑田が辺りを見ながら歩く。

エレンが後を付いていく。

畑田「おっかしいな？」

エレン「その地図、抜けが多すぎるのよ」

エレンが研究所の庭を見る。

庭で昭和天皇（39）がしゃがんで植物の葉を手で触っている。

エレン足を止め、畑田の腕を引っ張る。

畑田が足を止め、昭和天皇を見る。

エレン「さっきの手で、聞いてみようよ」

畑田「大丈夫かな？」

エレン「優しそうな侍従みたいよ」

畑田がゆっくり昭和天皇に近づく。

エレンも後続く。

畑田「すいません。陛下のお召の学者を」

昭和天皇が顔を上げる。

昭和天皇「朕？」

エレンと畑田の顔が固まる。

昭和天皇が立ち上がりエレンらを見る。

昭和天皇「君、だあれ？」

畑田が最敬礼をする。

エレンが口を開くが声が出ない。

昭和天皇「学者？」

エレンが首を縦に振ったり、横に振ったりする。

昭和天皇「どっちなの？」

エレンがうつむいてしまう。

畑田「恐れ多くも申し上げます。こちらの」

エレン「待って！」

畑田が最敬礼のまま、エレンを見る。

エレン「私が言うから……」

エレンが最敬礼をする。

エレン「申告します。私は鈴峰エレンと申します」

畑田「私は帝国海軍中尉、畑田勝幸です」

昭和天皇「で、彼女は学者なの？」

エレン「いいえ。報道カメラマンです」

畑田「記者も兼ねております」

昭和天皇「あ、そう。よく来たね」

エレン「あの……お聞きしたいことが」

昭和天皇「うん？」

エレン「あの、えっと」

昭和天皇「お顔を上げてくれませんか」

エレンと畑田は最敬礼のまま動かない。

昭和天皇「上げてくれない？」

エレンと畑田がゆっくり顔を上げる。

昭和天皇が微笑んでいる。

昭和天皇「何、聞きたいの？」

エレンが深呼吸をする。

エレン「今の日本が、陛下のご意思であるか？」

昭和天皇が少し困った顔をする。

昭和天皇がエレンのカメラバッグを見る。
る。

昭和天皇「それ、カメラ？」

エレンがカメラバッグを見る。

エレンがバッグを開け、カメラを取り
出す。

昭和天皇「見てもいい？」

エレンがうなずき、カメラを差し出す。

昭和天皇が笑顔でカメラを受け取る。

昭和天皇「ライカだね」

昭和天皇がレンズを見たり、レバーを
触ったりする。

昭和天皇がファインダーを覗き、エ
レンと畑田を見る。

昭和天皇「フラッシュ、ある？」

昭和天皇がエレンにカメラを渡す。

エレンがバッグからフラッシュバルブを取り出す。

エレンがカメラにフラッシュバルブを取り付け、昭和天皇に渡す。

昭和天皇がカメラをエレンらに向ける。

○(回想)同・生物学研究所近くの道・外(夕)

二人の皇宮警察官が歩哨している。

小さな破裂音と共に閃光が見える。

皇宮警察官A「今のなんだ？」

皇宮警察官B「銃声か？」

二人の皇宮警察官が走り出す。

○(回想)同・生物学研究所の敷地・外(夕)

昭和天皇が笑顔でカメラを返す。

エレンが頭を下げて受け取る。

昭和天皇「先ほどの質問について」

エレン「はい。お聞かせ願えますか」

昭和天皇がうなずく。

エレンが畑田を見て、手で書く仕草をする。

畑田がメモを手に書きだす。

昭和天皇「私は戦争は望んでいない」

エレン「それはアメリカとのですか？」

昭和天皇「もちろん。シナとの戦争もです」

エレン「では、軍部や首相について認めないということですか？」

昭和天皇「……私は英国の統治を範とします」

畑田「統治に関わらないと？」

昭和天皇「臣民が望んだことに、私が机をひっくり返すことなど……」

エレン「そんな！」

エレンが昭和天皇に詰め寄る。

エレン「恐れ多くも陛下は神様ではありませんか！」

畑田がエレンを止めに入る。

昭和天皇「朕は統治権の総攬者だよ」

エレンが怪訝な顔をして畑田と昭和天

皇を交互に見る。

昭和天皇「総攬とは手に取るだけ」

畑田「思いのままではないんだ。エレン」

エレン「そんな！ このままじゃあ戦争に！」

昭和天皇が奥に咲くコスモスを取る。

昭和天皇がコスモスをエレンと畑田に

差し出す。

昭和天皇「そうなれば、この花も見れないね」

エレンがコスモスに手を伸ばしかけて

止める。

エレン「陛下」

昭和天皇「何だね？」

エレン「先ほどの発言、書いてもよろしいでしょうか？」

畑田が驚いた顔をエレンに向ける。

昭和天皇は表情を変えない。

畑田「な！ 馬鹿か！ お前」

エレン「このままでは、陛下の本心は」

畑田「言うな！」

エレン「軍部や内閣によって封じられます！」

昭和天皇「でも、臣民は喜んでいるよ」

エレンと畑田が複雑な顔をする。

昭和天皇「じゃあ、撮って」

エレンが驚いた顔をして畑田を見る。

畑田も困った顔をする。

昭和天皇「いいから。神様お願い」

エレンが小さくうなづく。

エレンがゆっくり顔を上げ、カメラを構える。

エレンがカメラから顔を上げる。

エレンが困った顔をする。

昭和天皇「どうしたの？」

エレン「あの……」

エレンが胸の辺りを手に当てる。

昭和天皇が胸を見る。

昭和天皇のネクタイが曲がっている。

昭和天皇が笑ってネクタイに手を伸ばすが、なかなか直らない。

エレンが昭和天皇に近づく。

畑田が手を伸ばしてエレンを止めよう

とする。

エレン「失礼します。陛下」

エレンが昭和天皇のネクタイに手を伸ばす。

エレンの手は震えている。

笑顔でエレンを見る昭和天皇。

昭和天皇「怖い？」

エレンが顔を横に振る。

エレン「私は陛下の意志を伝えたいのです！」

昭和天皇が微笑んでいる。

昭和天皇「大丈夫ですよ。大丈夫だから」

エレンが微笑んでうなづく。

侍従Aの声「お上！」

エレン、畑田、昭和天皇が振り返る。

昭和天皇が手でエレンに離れるよう仕

草をする。

エレン「(小声)陛下！」

エレンが急いでカメラを構える。

昭和天皇が姿勢を正す。

エレンがシャッターを切る。

破裂音と共に閃光が瞬く。

侍従Aの声「お上！ 今のは！」

足音が聞こえる。

エレンがスカートの裾をつまんでお辞儀する。

畑田も一礼する。

畑田がエレンの手を引っ張って、その場から離れる。

昭和天皇がエレンと畑田を見送る。

昭和天皇の後ろから侍従Aが現れる。

侍従A「お上！」

昭和天皇が侍従に振り返る。

昭和天皇「どうした？」

侍従A「賊が入ったと皇宮警察から」

昭和天皇「そうなの？」

侍従Aが昭和天皇のコスモスを見る。

侍従A「あの、それは？」

昭和天皇がエレンらのいた方を向く。

エレンと畑田の姿は見えない。

昭和天皇が微笑む。

○（回想）枢密院・外観（夜）

○（回想）同・応接室・中（夜）

鈴木がソファでいびきをかいて寝る。
応接室の電話が鳴る。

鈴木が目を覚まし、起き上がってゆつくり電話に近づき受話器を取る。
ドアが開き、忍び足でエレンと畑田が入ってくる。

鈴木「賊？ 陛下は無事なんか？」

エレンと畑田がソファに座る。

鈴木「分かった。今から向かう」

鈴木が電話を切る。

鈴木がエレン畑田を見る。

鈴木「悪いな。眠ってたみたいだ」

畑田「いえ。お疲れのようですので」

エレン「そろそろ失礼いたします」

エレンと畑田が立ち上がる。

エレンがよろけて畑田に寄りかかる。

エレン「おっと！」

鈴木「大丈夫かね？」

エレン「すいません。飲みすぎたみたいで」

鈴木がテーブルのグラスを見る。

グラスには手つかずの酒が入っている。

鈴木が怪訝な顔をする。

鈴木「すまんが急用で車を回せない」

畑田「はい」

鈴木「エレンさんを送ってくれ」

畑田が鈴木に一礼する。

○(回想) 同・桔梗門・外(夜)

門が少し開きエレンと畑田が出てくる。

門が閉まる。

エレンがうずくまって靴を脱ぐ。

畑田「どうした？ 怪我が痛むか？」

畑田が屈んでエレンを見る。

エレン「靴ずれ」

畑田が笑う。

畑田「慣れないもんな。婦人もの」

エレン「笑うな！」

畑田「悪い、悪い」

畑田がエレンに背中を見せる。

畑田「ほれ」

エレンが小さく微笑んで畑田の背中に寄る。

畑田がエレンをおんぶする。

○（回想）同・お堀沿いの道路・外（夜）

道路には人がない。

畑田がエレンをおんぶして歩く。

畑田「ドキドキしてるな」

エレン「なっ！」

エレンが畑田の頭を叩く。

エレン「すけべ！」

畑田「ごめん」

エレン「……まったく」

畑田「どうだった？」

エレン「びっくりよ。いきなり行ったのに『よく来たね』なんて」

畑田「（笑い）俺も驚いた。さすが陛下だ」

エレン「……ねえ」

畑田「何だ？」

エレン「さっきのあれ、書くからね！」

畑田「……若林さんが止めるよ」

エレン「それでもよ！」

畑田「検閲でしよっ引かれるぞ！」

エレン「上等よ！」

畑田が笑う。

畑田「分かったよ……それでこそエレンだ」

エレン「だから、守ってよね」

畑田が小さく顔を横に振る。

エレンが笑う。

エレン「かりそめとはいえ、婚約者の頼みよ！」

畑田「……悪い」

エレン「どうしたの？」

畑田「転属命令が出た」

エレン「え……どこに？」

畑田「鹿児島」

エレン「鹿児島？ 船じゃないの？」

畑田がうなずく。

畑田「またハズレ」

エレン「違うかもよ？」

畑田「船なら広島かトラック島だからな」

エレン「そうなんだ……」

畑田「（小声）どうせならずっとここに……」

エレン「何？」

畑田が顔を横に振る。

畑田「いい……何でもない」

エレン「うん……」

○（回想）日本通信同盟ビル・外観（夜）

電気は消えている。

○（回想）同・入口・外（夜）

畑田がエレンをおんぶして来る。

畑田「いいのか？ 家じゃなくて」

エレン「狼を入れたくない」

畑田「失礼な」

畑田がエレンを降ろす。

エレンが笑う。

エレン「早く原稿書きたくて」

畑田「そっか」

エレン「連絡先、教えてね」

畑田が少し困った顔をする。

畑田「うん……分かった」

エレン「絶対よ！ 嘘ついたら！」

エレンがカメラバッグからフラッシュ

バルブを取り出す。

エレン「これをお見舞いするわ！」

畑田が笑う。

畑田「分かった、分かった」

エレン「あ、ちよっと」

エレンがカバンから閃光電球を出す。

エレン「お守り！」

畑田「電球？」

畑田がエレンから閃光電球を受け取る。

エレン「さっき陛下を写した時の」

畑田が驚いた顔をする。

畑田「……恐れ多いな」

エレン「神様だから、効果てきめん！」

畑田「……ありがとな」

畑田が閃光電球をポケットにしまう。

エレン「……それじゃ」

畑田がうなずいてエレンから離れる。

エレン「あ！」

畑田が足を止め、エレンに振り返る。

エレン「わ、私の気持ちは！」

畑田が口到人差し指を当てる。

畑田「帰ったら聞くから」

エレンが笑顔でうなずく。

畑田「捕まるなよ！」

エレン「うるさいなあ！」

畑田が手を振ってエレンから離れる。

エレンが畑田を見送る。

エレンの声「しかし、連絡は途絶えた」

○（回想）日本通信同盟ビル・事務所・中

若林が原稿片手にエレンを叱る。

エレンが口答えをする。

エレンの声「記事はお蔵入り。でも居座った」

○（回想）ニュース映像

「大本営発表」のテロップ。

大本営の軍人が記者やマイクの前で
「米英軍と戦闘状態に入れり」と発表。
エレンの声「そして、やはり戦争が始まった」

○（回想）軽井沢ホテル・外

木造の建物。

エレンの声「私は軽井沢に強制移住」
美夢の声「日本人なの？」
エレンの声「まあ、この外見ではね」

○（回想）同・調理室・中

中では数人の人が働いている。
もんぺを着たエレン（26）がまな板に
多くの芋を並べている。

エレンの声「緒戦こそ良かったものの……」

○（回想）ミッドウェー海戦の記録映像

空母などの艦船が爆沈する。

エレンの声「戦争は悪化していき」

○（回想）山本五十六元帥の国葬の記録映像

山本元帥の国葬の列が並ぶ。

エレンの声「山本さんも戦死した」

○（回想）原爆投下の記録映像

広島・長崎の原爆投下の映像。

エレンの声「そして一億玉砕を叫ぶ中」

○（回想）軽井沢ホテル・エントランス・中

中の人が全員、頭を垂れてラジオの前
で玉音放送を聞く。

○（回想）同・調理室・中

エレン（30）が炊事場に座り、まな板
を見る。

まな板には育成不足の小さな芋が二つ
置かれている。

エレンの声「戦争は終わった」

○（回想）日本通信連盟ビル・外観

旧日本通信同盟のビル。

○（回想）同・入口・外

男装したエレンがカメラバッグを持って少し歩きづらそうに出てくる。

エレンの声「戦争が終わって私は仕事に復帰」

美夢の声「畑田さん探しは？」

エレンの声「それどころじゃなかったわ」

○（回想）戦後の記録映像

戦艦ミズーリ号での降伏文書調印式。

GHQ 司令部に登庁するマッカーサー。

マッカーサーを見ようとやじ馬が集う。

エレンの声「価値観は百八十度変わり」

○（回想）新聞一面

A級戦犯リストを載せた紙面。

別の紙面に「陸・海軍解体」の見出し。

エレンの声「軍隊は完全に解体された」

○（回想）東京映画館・外観

雨が降っている。

エレンの声「休みに映画に行って、私は愚かさを痛感した」

美夢の声「愚か？」

○（回想）同・劇場内・中

エレンが座席に座る。

銀幕に特攻隊の出撃の映像が流れる。

エレンの目が大きくなる。

エレンの声「忘れてた。あいつは海軍の人間」

美夢の声「つまり……特攻隊に？」

エレンの声「行かない訳がないわ」

銀幕の映像に、米軍の攻撃を受け特攻

機が海面に墜落する映像が映る。

○（回想）同・入口・外

雨が降り続く。

エレンがうつむきながら出てくる。

エレンの声「帰ってから聞くななんて大嘘」

エレンが空を仰ぎ見る。

米軍機が空を翔る。

エレンが泣き顔でそれを眺める。

エレンの声「こうして私の初恋は終わったの」

○元的美澄高校・地学教室・中（夕）

生徒らが寂しげな顔をする。

エレン「残念だけど、話はここで終わり」

女子生徒A「一回も連絡無かったんですか？」

エレン「鹿児島島の時点で駄目だったの」

生徒らが首を傾げる。

エレン「そこはね、真珠湾の訓練の場所」

生徒が感心した声を上げる。

美夢「機密ってやつですか……」

エレンがうなずく。

エレン「では、私から最後に」

生徒が姿勢を正す。

エレン「最後まで聞いてくれてありがとう」

エレンが頭を下げる。

エレン「いい恋愛を。特に金村君！」

生徒らが金村を見て笑う。

エレン「会えるということは幸せよ！」

エレンがウインクをする。

金村が苦笑いをする。

○同・校門・外（夕）

雨はやんで、夕日がさしている。

一台のワゴン車が出てくる。

○走行中のワゴン車内（夕）

美夢が運転をする。

後部座席にエレンが座る。

美夢「ありがと。初めて聞いたよ」

エレン「私も楽しかったわ」

美夢「このまま帰る？」

エレンが窓の景色を見る。

夕日が沈む少し前の光景が見える。

エレン「ちよつと行きたいところが」

美夢「ん？ いいけど」

美夢がカーナビに手を伸ばす。

○皇居・外観（夜）

○同・皇居外苑・外（夜）

二重橋がライトアップされている。
数人の若い人がスマホで撮影する。

お年寄りが皇居に一礼する。

車いすに乗ったエレンが美夢に押され
てやってくる。

エレン「変わってないわ」

美夢「お話をして、思い出しちゃった？」

エレン「それもあるけど……」

エレンが微笑む。

エレン「嘘をついた報告を……」

美夢「え？」

エレン「さっきの話」

美夢「ちよ！ ちよつと！ え？」

エレンが手を振って笑う。

エレン「大丈夫。概ねはホント」

美夢「じゃあ、何が？」

エレン「畑田という男は」

エレンが腕を伸ばして皇居を指さす。

エレン「あの中の人間だったの」

美夢が口をパクパクさせてエレンと皇居を何度も見る。

美夢「こ、皇族！」

エレン「ええ。これはほんと」

エレンが腕を降ろし笑う。

エレン「道理で話がうますぎると」

美夢「ま、まあ、言われてみると」

エレン「ただの中尉が米内や山本、そして鈴木とコネがあるはずがないわ」

美夢「確かに……じゃ、じゃあ特攻は？」

エレン「……あいつ、生きていた」

美夢が目大きくする。

エレンが目を閉じる。

○（回想） 皇居・桔梗門・外

T「昭和二十二年・春」

皇居にサクラが咲いている。

門が開き自動車が中に入っていく。

○（回想）同・生物学研究所・外

侍従Bの後に正装したエレン（32）が
少し不自由そうに歩く。

侍従B「こちらです」

侍従Bがエレンを先に促す。

エレンが前に出る。

背広を着た畑田（32）が立っている。

畑田「死に損ねたよ……」

エレンが一礼する。

○（回想）同・生物学研究所・室内

室内は植物の標本や資料が整然と置か
れている。

ソファーにエレンと畑田が座る。

エレン「やっぱり、ここの人間だったのね」

畑田「悪い。海軍の方が動きやすかったから」

エレン「特攻隊に志願はしなかったの？」

畑田が小さく笑う。

畑田「したけど……皇族の血を残すために」

エレン「生かされたと……今は何を？」

畑田「皇籍は外れた。でも縁があつてここで」

エレン「あの花、育ててるの？」

エレンが庭になる花を見る。

畑田も庭を見る。

畑田「陛下に習いながらだけどね」

エレン「そつか……よかった、花が咲いて」

昭和天皇の声「うん。咲いてよかった」

エレンと畑田が慌てて立ち上がり、昭

和天皇（46）に最敬礼する。

昭和天皇「いいから、ね」

エレンと畑田がゆっくり顔を上げる。

昭和天皇「今日はお願いがあつてね」

昭和天皇が後ろを見る。

後ろの侍従Bが前にやってきて、エレ

ンの前にカメラを差し出す。

昭和天皇「国産の。使い方、教えて」

エレンが微笑んでうなづく。

○（回想）同・植物学研究所の庭・外（夕）

エレンと畑田が庭から出てくる。

昭和天皇と侍従Bが後から続く。

エレン「陛下。よろしければフィルムを」

昭和天皇「あ、現像いいの？」

エレンがうなずく。

昭和天皇がカメラを見る。

昭和天皇「あ、一枚残ってる」

昭和天皇がエレンにカメラを向ける。

畑田がエレンから離れる。

昭和天皇「畑田」

畑田「はっ」

昭和天皇「よいのか？」

エレンが怪訝な顔をする。

畑田が一礼し、エレンの横に並ぶ。

昭和天皇がシャッターを切る。

昭和天皇がカメラをエレンに渡す。

エレンが受け取り、カメラからフィルムを取り出す。

エレン「あの、陛下……」

昭和天皇「何だい？」

エレン「あの時の記事を書けなくて……」

昭和天皇「いいんですよ。あなたは悪くない」
エレン「でも、戦争は止められませんでした」
昭和天皇「うん、そうだね。申し訳ない」
エレン「もし、陛下のご発言が世に出てたら」

昭和天皇がエレンの発言を手で制す。

昭和天皇「今となつては、それは無為です」

エレンが小さく顔を横に振る。

エレン「後世に伝え、無為にはさせません！」

昭和天皇が笑顔でうなづく。

昭和天皇「では、あの写真はその一歩ですね」

昭和天皇が後ろの侍従Bを見る。

畑田「あの写真？」

侍従Bがマッカーサーと昭和天皇のツ

ーショット写真を差し出す。

畑田が納得した表情でうなづく。

昭和天皇「どう見ゆる？」

エレン「(笑い)新聞で見ました。恐れ多くも」

昭和天皇「何だね？」

エレン「私の方がかっこよく撮れます！」

昭和天皇が笑顔で小さくうなづく。

畑田があきれた笑いをする。

昭和天皇「では、今度は皇后とお願いね」

エレン「はい！」

昭和天皇「できれば普段着がいいかな」

昭和天皇が微笑む。

昭和天皇「畑田。送りなさい」

畑田「は！」

畑田がエレンの手を繋ぐ。

エレンと畑田が一礼して庭を後にする。

昭和天皇が二人の背中を見送る。

○（回想）同・敷地内の通路・外（夕）

エレンと畑田が手を繋いで歩く。

エレンが止まりうずくまる。

畑田「お、おい！ 大丈夫か？ 足か？」

畑田がしゃがんでエレンを見る。

エレン「ごめん！ ドキドキが……」

畑田が安どの表情をする。

畑田「意外と緊張するんだな」

エレン「怒るよ？」

畑田笑ってエレンに背を向ける。

畑田「ほれ！」

エレンが畑田の背中を見る。

エレンが笑いながら畑田の背中に乗る。

畑田「よいしょっと」

畑田がエレンをおんぶして歩き出す。

畑田「ホントだ。伝わってくる」

エレン「またか！ スケベ！」

エレンが畑田の頭を叩く。

畑田「いたた！ ったく」

エレンが笑う。

畑田「ありがとな。来てくれて」

エレン「……ねえ」

畑田「何だ？」

エレン「何で私を陛下に引き合わせたの？」

畑田「……なんか変わるかもって」

エレン「変わる？」

畑田「あの日本の空気が変わるかもって」

エレン「残念。それはマッカーサーでした」

畑田「それでも、感謝してるよ……とところで」

エレン「なによ？」

畑田「おれが皇族だっていつ気付いた？」

エレン「まあ、立ち振る舞いとか」

畑田「それだけ？」

エレン「後、前に鈴木さんが言いかけた時ね」

畑田「言いかけて……ああ、兵学校の話か」

エレン「そう。あんたが遮ったでしょ」

畑田「さすがだね。エレン」

エレン「まだ、隠してるでしょ？」

畑田「え？」

エレン「結婚かな？」

畑田「……敵わないな。どうして分かった？」

エレン「私とツーショット、避けたじゃん」

畑田「……ごめん、転属先で知り合った子と」

エレン「そつか……おめでと」

畑田「悪い……」

エレン「謝るなよ！ 結構つらいんだぞ」

畑田「ありがと……あのさ」

エレン「ん？」

畑田「俺の心は……」

エレン「(大声) 私の心は！」

畑田「え？」

エレン「私の心は陛下のモノよ」

畑田「そっか」

エレン「あんたじゃない……」

畑田「……ありがとな。ほんと」

エレン「いえいえ、臣民ですから」

畑田「陛下は人間だ」

エレン「おっと」

畑田「だから『国民』と」

エレン「はい」

○(回想) 同・枢密院入口・外(夕)

一台の自動車が止まっている。

エレンをおんぶした畑田がやってくる。

エレン「いいよ」

畑田「おう……」

畑田がしゃがんでエレンを降ろす。

畑田がエレンに振り返る。

畑田「あ、そうだ」

畑田がポケットから閃光電球を出す。

畑田「これ……助かった」

畑田がエレンに電球を差し出す。

エレンが手を伸ばして、止める。

エレンが首を小さく横に振る。

エレン「今度はそれで奥さんを守って」

畑田が一瞬、寂しそうな顔をして、電球を持った手を引き戻す。

エレン「……それじゃあ、お幸せに」

畑田「エレンも……」

エレンがアツカンベーをする。

畑田が苦笑いをして頭をかく。

エレンが微笑んで自動車に乗る。

自動車が走り出す。

○元の皇居・桔梗門・外（夜）

車いすに乗ったエレンを美夢が押してやってくる。

美夢「陛下の想いから、話してくれたんだ」

エレン「そろそろ話をする時期だと思ったの」

美夢「最後まで話せばよかったのに」

エレン「悲恋じゃないと盛り上がりがないわよ」

エレンが微笑む。

エレン「よく考えたら、私達は特異だったわ」

美夢「特異？」

エレン「私は合いの子。あいつはおそらく望まれぬ宮家の子」

美夢「もしかして、妾の子だったと？」

エレン「記者としての、私の勘だけだね」

美夢「そっか……」

エレン「でも、誤解しないでね」

美夢「何が？」

エレン「おじいちゃん、大好きだったからね」
美夢が笑う。

美夢「分かってるって」

エレンのお腹が鳴る。

美夢が声を出して笑う。

美夢「おばあちゃん、色気より食い気！」

エレンも声を出して笑う。

美夢「今度、陛下が撮った写真、見せてよ！」

エレン「いやよ！ あれは私の宝物！」

美夢「ちえー！ おばあちゃんのケチ！」

エレンを乗せた車いすを美夢が押す。

○エレンと畑田のツーショットの写真

エレンと畑田が並んで写る。ピンボケした二枚の写真。

エレンの声「陛下の名誉にかかわりますから」

○昭和天皇の白黒写真

ネクタイが曲がったままの昭和天皇の手にはコスモスが握られている。

エレンの声「これで本当にお話はお終い。ありがとうございます」

〈了〉

（二百字原稿用紙換算枚数・230枚）